

「本部町備瀬の砂浜はずいぶんやせた。海洋博の埋め立てで、新しく岬をつくってからだよ」

沖縄環境ネットワーク世話人の真喜志好一さんは、浜で船の手入れをする地元漁師が淡々と語った言葉が忘れられない。自然と共生する町として、フクギの美しい同地区に友人を案内したときのことだ。隆起サンゴの岬に挟まれたボケットビーチや干潟、琉球石灰岩の崖。多様性を誇っていた島の海岸線は、19

## 高率補助下の公共工事③

72年の本土復帰を契機にすっかり変わった。

環境省のまとめによると、98年時点で、県内の海岸線の全長約1757キロのうち、人手が加えられたのは約543キロ(約31%)。それから13

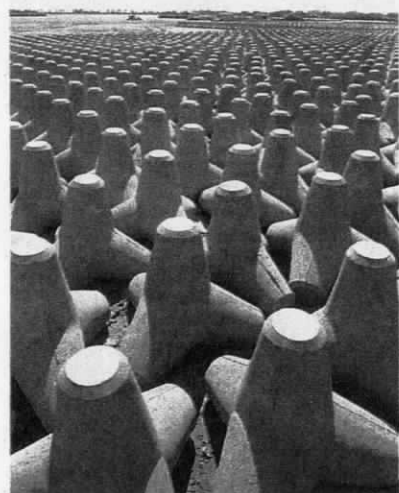
年が過ぎた今、本島の海岸からは地図上で確認できるだけでも180本の突堤が海に突

き出し、沖合には離岸堤と呼ばれるコンクリートの塊が浮かぶ。本島中南部最大の自然

浜が残っている場所は、浦添市のキャンプキンザー沿いだ。

海岸線が人工化した始まりは、台風による高潮被害を防

# 海岸整備やせる砂浜



中城湾港新港地区周辺の海底や護岸に積まれるのを待つ消波ブロック=1990年10月

ぐための海岸整備事業だ。県は復帰後、限られた事業費で効果をあげようと、高率補助を活用してコンクリート製の

高い護岸壁を設置。消波ブロックを添えた。

その後、「本土並み」のインフラ整備事業の一環で、海岸沿いに道路を通すための埋め立てが進んだ。「特に本島北部

る」。業者は、道路や漁港付近で自然浜がいつの間にかなくなっていくという新しい現象を指摘する。

「地元で頼まれて白砂を補充した自然浜は、金武町、国頭村安田、与那国町のナンタ

浜…。ナンタ浜は、民謡にうたわれる美しい浜なんだ」と

と侵食が進むエリアに分かれる。浜の消失を食い止めようとして突堤で浜の両端を囲うと、周りには別の浜がやせ

細る。その浜を守ろうと、また突堤をつくる。悪循環を絶つ方法は簡単に見つからない。

琉球大学の仲座栄三教授(環境建設工学)は「いつの間にか、県内の海岸線が突堤だらけになりかねない」と懸念する。実際、日本海に面した鳥取県の海岸沿いは、くしの歯のように突堤がいくつも

海へ突き出す事態になっている。 「環境全体にどんな影響が出るか、人間は算定するすべ

を持たない。自然はそもそも、そんなに簡単に測れるものではない」。(「沖縄振興」取材班=平島夏実)

「残っている自然浜も、砂がどんどん消えてやせてい

の西海岸では、崩れやすい山を削るより、海を埋め立てる選択をした」と県内のある砂採取業者は振り返る。さらに海岸をコンクリートで固め、陸続きの漁港をつくった。

だが、突堤や防波堤が海岸線に突き出すなどして地形が変わると、砂の移動は遮られ、海岸は堆積が進むエリア